

## 転勤

エビツチヨ!

私が、小学校五年から六年に変わる春の三月、北海道北見市からオホーツクの海のある紋別へ転勤となった。当時の父は、小学校の教員で昇進の為の転勤だった。私達は、長年、住み慣れた祖父母と伯母達と住んでいた、思い出のある北見の地を後にした。北見駅での、皆様方の万歳三唱を後に列車は紋別へと向かった。当時の父は、海老澤家、唯一の長男で、ずっと北見の地で、祖父母と生活しなければいけないと思っていたらしく、昇進の為とはいえ北見の地を離れる事はとても申し訳なく辛かったと父は語っていた。転勤先の紋別の方々も私達家族を温かく受け入れてくださった。私達は、古い教員住宅に一旦、荷物と家財道具を置いた。私達の住むことになる家は後二週間ほどでできる予定の新しい教員住宅だった。私達が住む予定の新しい教員住宅の東には、古い木造の教員住宅が建ち並んでいた。紋別小学校は、四十五人編成の六クラスが勉強し全校で三十六クラスあるマンモス校で、北と南に用務員のおじさん御家族が、住み込みで働く部屋のある学校だった。その裏にはクマザサが生い茂るなだらかな土手があり、学校の裏側の土手の山沿いに教員住宅が建ち並びその一番手前にできた新しいコンクリートの家が私たちの住む教員住宅となった。その住宅に入る前に古い教員住宅で私は山積みになった荷物の上にある木のリング箱の中に入っていた、少年少女児童文学全集を五十センチ程上の天上とのすき間で、木箱の上にゴロっと横になり無我夢中で読みふけていた。「一、三日して手足にブツブツの発疹が出た。とても痛がゆく、母にその事を言う」と母は「水があわなかったのかしらねえ」もしかして蜘蛛に刺されたのかも」と言っていて、たいした事ないという素振りを見せた。その発疹は、三、四日してなくなり私も紋別の水があわなかったのかなあそれとも虫に刺されたのかなあと思った。その後、教員住宅が完成し、私達、新居に移った。新しい家は三LDKで広い台所と畳み三畳程の物置きのある家で、とてもいいコンクリートと蘭草の匂いがした。私達は外に大きな石炭小屋もあってか、三畳程の物置は、私達三人娘の机を並べた勉強部屋となった。まん中の私はやはり机が三つ並んだ中のまん中だった。狭いけれど、勉強部屋

という感覚が、たまらなく豪華に思えた。父は、家の前の花壇に大好きなダリアの花を植え、母は、小学校と教員住宅の間にある熊笹の生い茂った場所で、雑林ガマを右に左に振り回して熊笹を薙ぎ倒し、私気が付いてみたら、五・六〇坪程の畑を作っていた。母は北見でも私の祖父と一緒に六百坪程を耕していたが、その時の母より紋別にきて畑を作る母は、とてもイキイキとして見えた。父は父で紋別周辺の植物の観察を依頼されたらしく、毎週日曜日は、母の作る甘い玉子焼きと梅干し入のおにぎり二個、キャベツと胡瓜の塩もみ、のお弁当に水とうチョコレートに冰糖、帆立の貝柱数個を持ち、(非常時の)近くの山へ長ぐつをはいて出かけていった。ある日、母が先生の奥様達と生け花をした時、生け花の花材は、母が花畑や近くの山で調達してきた物だったが、その生けてある木をみて「これは漆の種類の木だ」と父は母に言った。母は、そんなことないよと言い、父が言った漆の木をそのままにしていた。すると父の言った通りそのきれいな葉の木は漆の種類だったらしく、母の顔はパンパンに腫れあがり体もバンバンに腫れあがり「私のお母ちゃん、どこにいつてしまったの」という具合に見事に腫れ上がった。父に「それみろ」と言われながら母は浮腫んだ顔で笑いかゆい、かゆいといって、毎日、むとうハぷとというイオウの匂いのする液体を洗面器のお湯に入れて体をふいていた。そのむとうハぷは、水虫になりやすい父の足を洗う薬だった。二週間ぐらいしてだろうか、母の顔も体も元のきれいなおかちゃんの顔と体になった。その後、母の生け花には木は入らず木はお正月に生ける松の木だけとなった。しばらくして、私は南側のお部屋に住む用務員のおじさんの娘さんと友達になった。淑子ちゃんと言って字は違うが、母と同じ名前の女の子だった。(母は芳子) 淑子ちゃんのお母さんは、学校給食のパンを作るおばさんで、紋別市の朝早くから作る手づくりのパンはとてもおいしかった。淑子ちゃんの家に泊まった時は、たった四畳半二間で、家族四人が住みお布団は畳んで丸めて包み隠しソファアがわりにして狭い部屋でもアイデアで優雅に、生活しているのは、感心した。淑子ちゃんからは、初めて料理を習い、私が一番最初に作った、お料理はぎょうざだった。同年とは思えない程手際よく小麦粉を捏ねて生地をつくり薄くのばして丸い型でぎょうざの皮をあっという間に作っていた。二人で作ったぎょうざは、とても美味しく後々餃子は、私の得意料理となった。淑子ちゃんとは、よく遊び、ソフトボール、卓球も淑子ちゃんに教えてもらった。その淑子ちゃんと遊ぶ時、四才年下の妹は低学年で、よく私の後を追

い、私は妹の史佳ちゃんをいかに騙して置き去りにし、遊ぼうかとばかり考えていた。紋別の教員住宅の上には、土の見える山肌があつて、そこには石木があり、私は夢中できれいな半透明の模様のついた石木を探して、みつかった時の感激は計り知れない物があつた。父に石木は昔木だったのが長い年月をかけて石の様になり、その中にある透明な石は遠い昔液体で流れ込んだ物が、固まったことを聞き、みごとと宝石になる事も知った。そして薄く細かい線の様にくずれる木石は、石わたという事も知った。紋別の海には砂浜にメノウの赤い小さな石が偶然に見つかり海に行つた時は何時間も赤いメノウをさがすのが楽しみになった。山は山で太古の昔はどんなふうだったのだろうか？虫や動物の化石はないか夢中になった。その木石の石綿もアンカの中に入り、やはり黒い宝石で作られた豆炭をいれる道具に実用化されている事もおしえてもらった。

紋別の海岸には、海で取れる魚やカニの加工場があり、カニを茹でる時に出る独特のニオイが海岸の工場から湯煙りと共に漂いとても強烈なニオイだった。その海から私達の教員住宅の裏山まで三キロメートルくらいだろうか・・・毎朝早く空はカラスの大群が長く細丸い鼻水をそらにももの凄く大きくまっ黒にたらしめた様な感じでカラスの群がカアカアと呼びながら海に向かって飛び、夕方やはりカアカアと叫んで群で山に戻って休む、みごたえのある風景だった。みなには船を留める大きなキノコの様な鉄柱の底い柱があり、そこに太いロープで何隻もならば船の隙間をぬってギャーギャーと鳴いて飛び交うたくさんのカモメを見るのも初めてだった。紋別のカラスは童謡の「カラスなぜ鳴くのカラスは山に、かわいい七つの子があるからよー」という歌が似合う様なカラスの群ではなかった。でも教員住宅に迷い込んだちいさなあちゃんカラスは、力強いカラスの群には似合わなくひ弱で、今にも死にそうで、そのカラスに何という名前をつけたか忘れたが、私達姉妹は一生懸命、生き延びる様に世話をし、大きくなって死なずに飛び立って行つた時は、ホッと胸をなで下ろした。そんな紋別で一番脅いた事は、お正月を過ごして二月か三月だったであろうか、朝方まだ夜が明けぬ時、地獄の釜の蓋をあけるといふ表現が良く似合う、ゴオーという家が崩れるかと思う様な地響きがしたことだ。私は何事が起つたかと思ひ、とびおきて、普段から言われている枕元に置いてある服を反対側からすぐ着た。起きたら何事もなく静かで、家も崩れていなかった。その日その事を父に言ったら、流水が押し寄せて紋別の海に接岸した音だという。その音がした

時の恐怖と驚きは今も印象にのこっている。しかしその轟きと恐怖の心は次の年にはもう二度と味わう事がなく、環境に慣れるという事は凄く恐ろしい事だということも知った。今思う、引越して失うことも多いが得る事も多い。その土地土地で長くすんでいるひとにはわからない習慣の違いや言葉の違い環境の違い、政治や行政のあり方の違いがわかる。新しい感激とこれから何をしなければならぬかがわかる。三年あまりで紋別の地を去ってまた転勤したが、札幌で三十年ぶりに淑子ちゃんと会ったら、その時「俱ちゃん紋別は今、ロシア人でいっぱいだよ、電気製品だってワット数の異う電気製品を置いてるし」と聞いて吃驚した。私は「ああ、北海道はロシアが近いし、ロシアの方々も仲良く出来てよかった。」と思った。そしておとし北見に帰って何十年か振にイオウ山、摩周湖と観光したが、中国や韓国の人が多いのにびっくりした。京都は西洋の人が多いという。日本の中でも地域で観光客は異うのだなと知った。

愛媛の商家に嫁いだ私は三十六年でやっと商売が好きになった子供にすぎない。今住んでいる砥部には、衝上断層のある天然記念物がある。もし私が長生き出来るとしたら、その意志を研究し、最後の転勤先のこの地に、何万年も前に、天地がひっくりかえった地層や石の博物館を建てたい。日本の中でも、北海道、四国とそれぞれ動植物がちがい、愛媛は、雪国から三月、愛媛におとずれると、タイムカプセルにのった様にここは張るが一足先にきている風景を今の子供たちに体験させたい。転勤、引越すと、その場所に住まないとわからない自然のいだいさ、その土地の恵みを今の子供たちに知ってほしい。近年、自然災害が多く人々の発展の為に作られた産物が害をなす世の中、日本の文化財は建て物、生活習慣、言葉、食べ物はもちろんだが、私達が住んでいる日本という国そのものが文化であることをもっとわかってほしい。この思いは一度ふる里をはなれ出てみないとわからない現実である。もう六十一才の私は、その事を皆わかってほしい思いは、語ることに出来ない。

エビッチョ！

北海道北見市生まれ

藤学園卒・中京大体育学部卒

東郷町立東郷小学校勤務

二年後、結婚の為愛媛へ